様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２６ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５５１６０１６

研究課題名（和文）地域共同体の変容と青年集団―東日本大震災に直面して

研究課題名（英文）Transformation of Local Communities and Youth Groups after Great East Earthquake

研究代表者
辻　智子（TSUJI, Tomoko）

北海道大学・教育学研究科（研究院）・准教授

研究者番号：２０６０９３７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：現在進行形での記録化作業は『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』(第3号、2014年5月)(第4号、2016年2月)にまとめた。執筆者・協力者は北海道から沖縄まで約50人である。書き手を含む青年団メンバーとこれを共有し議論を重ねた。その結果、次の点が明らかとなった。一つは、急激な社会変動によって旧来とは異質なものや人との接触が生じ、従来の伝統の継承とともに新たな集団形成と活動が生じた。二つは、地域を越えた青年集団が支援から交流・学習へと継続的展開を見せ各々が自らの地域を新たに見直す契機となっていた。三つは、原発避難者にとっては地域への思いが強いほど引き裂かれた状態を創出していた。

研究成果の概要（英文）：I made two booklets, which reported how Japanese youths survived and lived in and after the 3.11 disaster. Documents in these booklets were written by themselves or their narratives in my interviews. Our findings are as follows.
1)3.11 disaster affected drastic social changes and a lot of new people came into these stricken rural areas. Then local youths accepted the outside of things and changed themselves and created new activities while maintaining a balance with inherited traditions. 2) Youth groups visited the disaster-stricken areas from other regions. Even after the end of the emergency supports they continue to visit and interact with the youth in that areas. They exchange their own experiences and look again their own communities. 3) In the case of evacuees by the nuclear accident, they are torn between residents in their hometown and ones living in new lands, especially it’s so serious for the youths having a strong attachment to their hometown.

研究分野：社会科学

キーワード：青年　青年団　地域　地域共同体　地域社会　東日本大震災　原発避難　記録

１．研究開始当初の背景

本研究は、平成 23 年度～平成 24 年度の科研費(研究活動スタート支援)助成研究「現代日本における地域共同体の変容と青年集団―東日本大震災に直面して」(課題番号 23830076)の継続的発展として行った。この一連の研究は次のような問題意識と社会状況の中で展開されるものである。

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災が襲ったのは、農林漁業を主たる産業基盤とし、地域共同体としての人間関係が色濃く残る地域であった。これらの地域には伝統的な地域青年団（青年会などとも呼称）が集落・市町村単位で存在し、その土地の伝統的な芸能の継承や祭礼の実施、地域社会への貢献、様々なボランティア活動、青年どうしの交流・学習活動を積み重ねてきていた。こうした既存の地域青年団は、今回の大震災に直面し、どのようにその姿や活動を変容させてゆくのか、また地域青年団の存立基盤である地域共同体自体はどのように変容してゆくのか。これは、社会教育研究上の現代的な課題であると同時に、震災からの復旧・復興の過程における喫緊の課題とも実践的にかかわっており、まさに現時点において取り組まねばならぬテーマであると考えられた。

また、青年・若者をめぐる昨今の議論や研究は、都市部の青年とその貧困問題に焦点化され、地方の若者たちの現状については相対的に言及が少ないという状況があった。なおこれはここ数年のうちにやや変化が見られるようになり、「地方」「地元」「地域コミュニティ」と若者との関係に注目が寄せられるようになっている。とはいえ、そこでの注目は、個人ないし個人間の緩やかな関係性やネットワークに向けられるものであり、若者の自立をめぐる文脈において、「ボランタリーなグループ参加が人間を育てる」との視点から集団活動を通じた成長とその支援（ユースワーク）の重要性が指摘される一方、若者たちの小集団とその活動展開に即した研究、とりわけ農山村部や地方のそれは、歴史的な研究を除けば、依然としてほとんど見受けられない状況は変わっていない。

２．研究の目的

上述の問題意識を受けて本研究は次のようにその目的を設定した。（１）大災害（東日本大震災）に直面した地域社会の変容や地域共同体の再編の経過をそこに暮らす青年の視点からとらえ、（２）その過程における①地域青年集団、②地域青年集団のメンバー個人（元メンバー含む）、③地域青年集団の地域を越えたネットワークの足跡を記録し、（３）地域社会にとって、および現代日本の青年たちにとって地域青年集団が果たす役割とその意味を考察する。加えて、経験を記録する中で共同的に展開される青年たちの「語る」「聴く」「書く」「読む」の集団的行為を教育学の視点から考察することも目的としている。

３．研究の方法

本研究の方法は、（１）地域青年団メンバー個人への定点観測的なヒアリングと、（２）地域青年団および日本青年団協議会の諸事業への継続的な参加（参加者ないし助言者等）を通して、それらを記録化してゆくことを主とするものである。2013 年 4 月～2016 年 3 月の経過は主に以下の通りである。

○2013 年 6 月、北海道・東北青年団連絡協議会による『生きる』第 2 号の合評会および原発に関する学習会（福島県会津若松市）。
○2013 年 10 月、岩手県陸前高田市・NPO 法人桜ライン 3.11 代表（岡本氏）ヒアリング。
○2013 年 10 月、NPO 法人静岡県青年団連絡協議会による「いわて復興スタディツアー」（岩手県陸前高田市）。
○2013 年 10 月、岩手県陸前高田市・陸前高田市青年団協議会「第 57 回青年芸能祭」。ここに静岡県・宮城県の青年団員らが参加・合流。
○2014 年 2 月、日本青年団協議会主催座談会「東日本大震災と地域青年―『生きる』執筆者を囲んで―」（札幌市）。
○2014 年 3 月、日本青年団協議会全国青年問題研究集会。
○2014 年 12 月、宮城県山元町視察。青年団 OB（窪田氏）ヒアリング。山元町の青年倶楽部「翔」のメンバーと意見交換。
○2015 年 3 月、日本青年団協議会全国青年問題研究集会。静岡県青年団連絡協議会メンバーにヒアリング。
○2015 年 8 月、宮城県青年会館にて岩手・宮城・福島の各県青年団会長による座談会。
○2016 年 1 月、福島県浪江町出身の青年団 OB（古農氏）ヒアリング。
○2016 年 1 月、宮城県沿岸部を視察。青年団 OB（岩崎氏、芳賀広美氏、芳賀孝司氏、高橋氏）ヒアリング。
○2016 年 2 月、福島県浪江町出身の青年団 OB（志賀氏）ヒアリング。
○2016 年 3 月、日本青年団協議会全国青年問題研究集会

４．研究成果

（１）　手記・ヒアリングの記録冊子の継続的な作成・配布と活用

『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』第 3 号（2014 年 5 月、154 頁）、同第 4 号（2016 年 2 月、91 頁）を作成・配布した。これら記録冊子の執筆者・ヒアリング協力者

は北海道から沖縄まで青年団関係者だけでも約 50 人に及んだ。被災地の関係者のほとんどは第１号（2012 年 3 月）より継続している。また中国や韓国からの青年団・社会教育関係者の視察・訪問を迎えるにあたり、記録冊子より２人の手記を中国語・韓国語に翻訳して共有した。

青年団の学習会でこの記録を学習資料として活用したり（2016 年 3 月、日本青年団協議会全国理事学習会など）、また学習会での講義や意見交換を記録化したり（2014 年 2 月、日本青年団協議会主催座談会「東日本大震災と地域青年―『生きる』執筆者を囲んで―」）など、記録を媒介として、読み手どうし、書き手どうし、読み手と書き手の意見交換や相互交流を定期的に行い、それに伴走していることも本研究の特徴と言える。

これらの取り組みは、しかし、様々な問題をはらみながらの試行錯誤であった。それは、地震・津波発生からの時間の経過とともに生じる個々の状況と気持ちの「温度差」であり、また「忘れたい」「思い出すのは辛い」「いつまでも被災地・被災者と言われたくない」という思いと「風化させたくない」「伝えたい」という思いに引き裂かれながらの葛藤であったと言える。

（２） 分析・考察（概要）

一つは、震災という急激な社会変動を経験したことで地域の伝統の継承に新たな視点と動きが加わったことである。岩手県陸前高田市の地域青年集団の例では、従来の形で地域青年集団を維持しながら、同時に、新たなテーマやメンバーと合流して NPO 法人を立ち上げ活動を始めていた。そのメンバーは重なりながらずれている。外からの強制的な変化の要請に地元の青年は、変えない部分と変わらざるを得ない部分を同居させていたともいえる。異質なものの同居状態がどうなってゆくのか、またそういう状況を地域の青年たちがどのように認識してゆくのかはこれからの推移とあわせて見てゆきたい。

二つは、地域を越えた青年集団が支援活動から交流や学習へと継続的な展開を見せ、その活動が自らの地域を新たに見直す契機となっていることである。静岡県団の場合、それは地元で将来起りうる災害を想定しつつ、県団が県下の青年団の学習活動(交流含む)として組織的・継続的に取り組み、自らの地域とそこでの自分たちの生活や活動のあり方を考えることへと発展していた。ただ、これは津波被害とその後の地域復興に関する点でより明確化されたものの、原発被害については、より慎重な展開となっている。とりわけ原発立地・関連地域では、最も切実な課題でありながら、自らの暮らしの根底部分にかかわる問題であり、そう軽々には語れない。

三つは、原発事故による避難を余儀なくされた人びと、とりわけその土地に根を張って生きてきた人びとは、時間の経過と共に、複数の地域とのかかわりのなかで引き裂かれた状態に置かれることである。帰還困難区域の住民にとっての地域社会の変容をあえて整理すれば次のように言えるかもしれない。誰も住まなくなって荒れ果ててゆく家と地域、それを見ながら何もできずにいる住民、その住民は各所に散らばり、たまに集まって地域住民アイデンティティを確認するが、各人の思いや生活状況は異なり、結局、その紐帯は震災まで同じ地域に暮らしていたという事実と当時の思い出となる。日常的な地域のつながりは解体されている。そして若い世代ほど新たな地域社会に定着してゆく。ただし、福島県民としてのアイデンティティ、ないし原発避難経験者として思いを共有する場が若い世代の中に新たに立ち上がっている様子も示唆された。

以上の内容を以下で補足的に詳述する。

◆伝統の継承と新たな動き――岩手県陸前高田市の場合

岩手県陸前高田市には震災前より地域社会に根づいた青年会が存在していた。戦後の町村合併によって 1955(昭和 30)年に誕生した陸前高田市では、旧町村単位の青年会が存続しており、それが陸前高田市青年団体連絡協議会（通称、市青協）を構成してきた（市青協が岩手県青年団体協議会に加盟、岩手県青年団体連絡協議会が日本青年団体協議会に加盟）。しかし、東日本大震災によって会員 1 名が死去、半数以上が家や職を失った。このようなきわめて厳しい状況下にも関らず、震災の年の秋には、恒例行事である「第 55 回市青協青年芸能祭」を小学校体育館にて開催、また津波到達点に桜の木を植えてゆく活動「桜ライン 311」を展開、これは後に NPO 法人化して独立事業となった。並行して、徐々に復活する各地域行事にも震災前のように参加しながら、震災後の新しい町づくりに青年がかかわる取り組みとして定期的に「市長と語る会」を開催している。震災前の状況を復旧・復活し伝統を継承しながら、新たな動きを展開していることがわかる。この「伝統の継承」と「震災後の新たな動き」はどのような形で接続しているのだろうか。本研究の過程では2つの点に注目した。1つは、震災前からの地域社会と青年（会）との関係であり、もう１つは、地域内外の青年層の移動と交流である。

◆地域を越えた青年団相互の学習・交流・支援ネットワークの展開―静岡県青年団協議会の場合

静岡県団では、例えば 2013 年度、一連の活動として次のような取り組みを行った。

○1 月、静岡県青年問題研究集会で学習会を開催。ゲストに岩手県陸前高田市から泉田将治さんを迎えて講演会および分科会。
○5 月、上記分科会メンバー3 人が陸前高田市を訪問し、現地で青年たちと交流。スタディツアーの企画を立てる。
○9 月、岩手県陸前高田市スタディツアーの事前学習会を開催。
○10 月、3 泊 4 日のスタディツアー実施。1 日目は泉田さんの案内で市内を視察した後、学習会・交流会、2 日目は市内長洞地区仮設住宅「長洞元気村」で工房建築の手伝いと地元住民との交流、陸前高田市青協主催の青年芸能祭を鑑賞し、スタディツアーの感想を意見交換。
○11 月、スタディツアーの事後報告会を開催。

このように静岡県団は、県団メンバー自らが動き学習しながら、県団加盟の地域青年団メンバーへの学習会を企画・運営している。その運営の過程は、＜事前視察→計画立案→事前学習→現地ツアー→事後学習＞とたいへん丁寧なもので、2014 年度は福島へのスタディツアーを、2015 年度は宮城県スタディツアーを企画・実施している。いずれも現地の青年団が受け入れ（岩手の場合は陸前高田市青協、福島の場合は福島県団、宮城の場合は宮城県団）、青年団や OB・OG が案内して説明をしたり現地の適当な人や場所を紹介したりしている。

◆原発問題と青年団

地域を越えた青年団どうしの交流の中で、東日本大震災の個々の体験や記録を活かした学習活動が展開している。中でも、原子力発電所(以下、原発)をめぐる問題とその被災地の状況にむき合って行こうとする動きは注目される。なぜならそこ（地域を越えた青年団どうしの交流を含めた学習の場）には、故郷を追われ今もなお避難生活を余儀なくされている人、放射能による被害に翻弄されている人（農業者など）、原発を受け入れ地元経済が原発関連産業によって支えられる地域に暮らし自身や家族や親戚や友人知人が原発で働いている人たちが顔を合わせ、その場を共有することになったからである。今、東日本大震災を機に原発問題が地域の青年団の中で語られ始めつつあるとしたら、福井でいえばほぼ 30 年ぶりのことと言える。ただし、その開口は慎重かつ時間のかかるものであり、現時点では、各地域レベルの青年団でどのように議論が重ねられてゆくのか、またそれが当該地域社会にどのような変化をもたらしうるのかはまだ見通せない。

◆「移住」か「避難」か――原発避難者にとっての地域

原発事故発生時、福島県浪江町で暮らしていた 2 人の青年団 OB に、継続的なヒアリングを実施してきた。時間の経過と共に、語りの内容、そしてその語り口もまた大きく変わった。例えば古農さんの場合、合計 3 回ヒアリングをさせてもらった。1 回目（2012 年 3 月）の時は、震災発生時から避難先に落ち着くまでの経過が、怒り、悔しさといった激しい感情とともに詳細に語られた。青年団活動と地域で培った人のつながりの糸が「ワイヤーみたいに強かった」ことが、そこでの命綱だったことを語ってくれた。2 回目（2014 年 2 月）の時は、1 回目の時の饒舌さとは打って変わり、言葉を発するのが苦しそうな様子だった。一つひとつ言葉を選びながら、ゆっくりと語ってくれた。そしてそこには、迷いと苦悩と葛藤があった。3 回目（2016 年 1 月）は、迷いながらも次の定住先を決め、そこで農業をしながら暮らしてゆく見通しを立て、それに向けて少しずつ準備をしているところだったが、それを、「移住」と言うのか、「避難」と言うのか、どっちでもあり、どっちでもないとしか言うことのできない自分を古農さん自身がどのように受けとめていいのかと困惑している様子が強く印象に残った。農業者としては、今も「帰還困難区域」に指定されたままの浪江の家の農地への思いは吹っ切れているように見えた。しかし、地域への責任、地域への思いはなくならない。強制的に地域から分離された状態で、いつになるかわからない帰還後の暮らしを想像しながら、自分にとっての家や農地や地域について考えながら、「移住」と「避難」との間で引き裂かれている様子がよくわかる。未だ帰還困難区域の地域の「再生」「復興」をどのように見通すのか。地域には戻らないが地域の復興にはかかわる地域住民といったような、これまでにない新たな局面が求められるとするならば、賠償問題への対応を含めた法律や制度などもあわせて考える必要がでてくるだろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0　件）
〔学会発表〕（計　１　件）
（1）辻智子・「地域共同体の変容と青年集団（その３）―共同的な学習・実践の歴史的展開―」（日本社会教育学会第 60 回研究大会（東京学芸大学・東京都小金井市）自由研究発表、2013 年 9 月 28 日）

〔図書〕（計 0 件）
〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：
○取得状況（計　0　件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕ホームページ等　（計　2　件）
（1）記録冊子の作成・頒布
・『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』第 3 号（同編集委員会編・発行、2014 年 5 月、全 154 頁）
・『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』第 4 号（同編集委員会編・発行、2016 年 2 月、全 91 頁）
（2）講演：辻智子「東日本大震災を通して学ぶ意味―地域青年の視点から―」(NPO 法人静岡県青年団連絡協議会主催、スタディツアー学習会、岩手県陸前高田市横田町コミュニティセンター、2013 年 10 月 12 日）

６．研究組織

(1)研究代表者
辻　智子
（北海道大学大学院教育学研究院准教授）
研究者番号：20609375

(2)研究分担者　なし
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者　なし
(　　)

研究者番号：